

まえがき

本書は“ビートルズ作品読解ガイド”の続編である。つまり、“ビートルズ英語読解ガイド”の延長にある。とは言え、両書を経由せずに本書へ辿り着いた読者も少なくないことだろう。そこで、このシリーズ執筆のそもそもの背景を改めて記しておきたい。

私が The Beatles の音楽を初めて耳にしたのは、日本におけるレコードデビューの直後。1964年3月、中学二年が終わった春休みのことだった。ラジオから流れてきた I Want To Hold Your Hand にしびれて、翌日レコード店へ飛んで行った。すぐにまた聴きたかったからだ。初めて手にしたドーナツ盤。その後、ビートルズのものに加えて、他の英国のビートルグループの旧作および新作レコードも続々と発売されたのだが、私は彼らの音楽とファッションのみならず、彼らの言葉である英語に大きな興味を抱くようになった。好きになると勉強ははかどるもので、高校でも大学でも英語の成績は常に上位。レコードの歌詞に親しみ、その多くを暗記していたことも役だったと思う。社会人になってからは、英語を主たる道具とする輸出業務、国際業務、翻訳業務などに従事。そして私のビートルマニアは、バンドの解散にもめげず、レノンとハリソンの死も乗り越えて、今でも続いている。

2007年の夏、私は“ビートルズ英語読解ガイド”という本を著した。老練なビートルマニアックが、なぜ今さらのように執筆を行ったのか。それは、1980年代以降に日本で発売されたレコードの歌詞カードや図書にどのような記述があるか知らなかったからだ。1968年11月発表のホワイトアルバム以来、新譜を一刻でも早く手にしたい私は、アメリカから航空便で入荷する輸入盤を買っていた。当時は日本発売が二カ月前後遅かったのだ。日本盤に付属する、あたかもすべて自分で調べたかのような言い方の説明書や、間違いだらけの歌詞カードなら、無い方がましという思いもあった。CDも米国盤で揃えた。また、書籍も、英米で発売された信憑性のありそうなものを原書で読むだけで、典拠を明らかにしていないものや、日本語に焼き直されたものには関心を払わなかった。私にとって新しい正確で重要な情報はないと考えていたからだ。加えて、誤訳の可能性もある。

そうこうするうち、2005年になって、書店の店先でたまたま見かけたビートルズ関連図書をめくって、驚いた。掲載されている歌詞の誤訳の多いこと。各CDに付属する歌詞リーフレットはどうかと調べてみたら、その対訳にも誤りがたくさんあった。それどころか、歌詞自体の聴き取りが正しく行われていない箇所もあちこちで見つかった。レコードが最初に発売されてから40年前後の時が経っているというのに、このような稚拙や誤謬が依然として、しかも公式CDのパッケージにまで、まことしやかに記されているとは。ビートルズの歌詞が正確に理解されず、そのために彼らの考え方が誤解されたり、その文芸の持つ価値が正当に評価されていなかったりするような現状を知って、彼らを愛する私は行動を起こす決心をした。

不十分であったり不正確であったりする情報が既に日本の隅々まで蔓延していると思われる中、正しい読解をどのように広めたらよいのか。問題点の結論を単に指摘するだけでは、通説になっている間違いを駆逐することは不可能であろう。そこで、私の歌詞解釈の正当性もしくは合理性を、初歩からの英文法解説を交えて著述することにした。学問性を併せ持たせることによって説得力を高める試みである。そして、私がこのようなアプローチを取ることによって、ビートルズ音楽の愛好者は、ビートルズへの理解を深めるのみならず、楽しみながら英語学習を行うことができるはずと考えた。そして誕生したのが“ビートルズ英語読解ガイド”。彼らがレコーディングアーティストとして活躍した最初の五年間に発表したオリジナルナンバー107曲を取り上げた。

その半年後の2008年初頭には、続編としての“ビートルズ作品読解ガイド”を出版。バンド活動の最後の三年間に発表されたオリジナルナンバー79曲と、後に制作された2曲、計81曲の歌詞を分析した。前期の作品にも増して、難解な部分や言葉自体が聴き取り難い部分があるが、そのような部分をはっきり指摘し、不明確な理由を説明した。黙って通り過ぎたり、意識を装った適当な対訳で逃げたりすれば、表面上は第一人者による立派な著作に見えるが、読者を欺くことになる。私は敢えて不可能を認め、疑問点を提起する立場を取った。このことも手伝ってか、両書とも、心あるビートルズファンから評価されていることは、嬉しい限りである。感想を私宛にメールで送ってくれる読者も少なくない。

そのようなメールの中に、バンド解散後の特定メンバーのソロ作品の解説を望む声がいくつかあった。正直なところ、私は面食らった。“ビートルズ英語文法ガイド”（2008年11月刊行）と“ビートルズ作品英和辞典”（2009年10月刊行）は当初から企画していたものの、その先は考えていなかったからだ。しかし、辞典の出版を達成して安堵している折に、同様の要望がまたいくつか届いた。今度は私をその気にさせた。試しに、解説の対象となるCDの日本盤を見たところ、歌詞リーフレットの記述は悲しむべきものが多かった。私のやる気に火を付けた。

要望のほとんどが特定の一人に対する関心を示していた。多くはレノンだった。だからと言って、一冊ごとに一人に的を絞ると、ごく一部の人以上にとってはつまらない本が複数できることになってしまうだろう。しかし、レノンとビートルズのファンはマッカートニーやハリソンへの興味もある程度は持っているはずだ。さらに重要なことは、一人だけに焦点を当てると、他の三人の同時期の活動ぶりに注意が及ばなくなる。実際には、四人は解散後も交わったり、関わったり、影響し合ったりしていたのである。そこで、四人を並行して追って行くことにした。

本書は、元ビートルたちのソロ録音で、1969年夏から1973年春までの四年間に発表されたオリジナル作品を取り上げる。レノンのものが38曲、マッカートニーが62曲、ハリソンが25曲、スターが5曲。計130曲になる。先入観を排し、根拠のない想像をできる限り抑えて、歌詞の原文を文脈と当時の状況から解釈するようにしている。

作曲、編曲、演奏、録音、蓄音盤化などの解説は行っていない。これらの点については、既に内外で多くの図書が出版されている。私の出る幕ではないと心得る。

歌詞の全文を、メロディーやリズムにとらわれずに、普通に文章を書く体裁で掲載できればよいのだ、著作権の観点から、見送っている。歌詞の広い部分なり全体像を一目で眺めるには、CD付属の歌詞リーフレットや、市販されている楽譜などを参照して欲しい。本書はそのような出版物の代わりになるものではない。

記述の仕方について説明しておく。歌詞の中の語句に直接言及する際は、例えば *Imagine all the people living life in peace* のように、その語句をイタリック体で表記してある。〈 get something through one's head 〉のように、〈 〉で挟んであ

るものは、言い回しなどの基本的な構成を示している。「」に入っている和文は、私の訳語。読者が理解しやすいように、敢えて直訳の域を出ないようにしてあることが多い。一方、他書からの引用の前後には、『』を用いた。また、著作物の題名は、英語のものは大文字だけで記し、日本語のものは“ ”でくくってある。

〔 〕内の文字は楽曲のタイトルを示す。数字の場合は、本書における作品番号。あくまで整理の便宜上のものである。〔L-001〕のごとく、アルファベットを冠して、Lはレノン、Mはマッカートニー、Hはハリソン、Sはスターキーが作詞者であることを表す。数字は、個人ごとに年代順になっている。

ところで、弁解しておきたいことがある。本書で扱う楽曲の中に、ビートル（ビートルズのメンバー個人）のソロ作品は二十足らずしかない。あとは元ビートルの作品である。この二つの範疇をまとめた短い言葉があるとよいのだが、考え付かなかった。他方、多くの人に本書の存在を知ってもらうためには、図書館のPCやウェブで検索しやすい既成語を題名に含めておく必要がある。そこで本書を“ビートルズ・ソロ作品読解ガイド”と呼ぶことにした。よって、この‘ビートルズ’は‘ビートルズのメンバーまたは元メンバー’という意味と解釈して欲しい。

バンドとしてのビートルズが残した楽曲の多くは、永遠に多くの人によって鑑賞され続けられると思う。だが、メンバー個人もしくは元メンバー個人の作品は、既にCDなどを所有している人でも、聴く機会が少ないかもしれない。本書によって、そのような埋もれがちの名品が再発見され、再評価されることを切に願うものである。歌詞の背景と内容が正しく理解できれば、以前よりも一層興味深く鑑賞できるはずだ。

本書について意見などがあれば、聞かせて欲しい。異論や、私の知らない情報は、特に歓迎する。

2011年10月
秋山 直樹